

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

B6判  
三五二頁  
三五〇〇円  
連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

昭和六十一年十二月一日発行

# 季刊 連句 第15号



水原秋桜子編 二三〇〇円  
俳句鑑賞辞典  
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
現代俳句鑑賞辞典  
結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
季語辞典  
日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
難解季語辞典  
古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 九〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石六三郎 A5 六〇〇〇円

国語慣用句辞典 白石六三郎 B5 六〇〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 五〇〇〇円

日本語語源辞典 堀井幸知編 B1 八〇〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 東郷 B6 一八〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇樹 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 堀井幸知他編 B6 一三〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井幸知他編 B6 一三〇〇円

難訓辞典 中山 幸徳 B6 三〇〇〇円

名乗辞典 荒木良造編 B6 一八〇〇円

名数数詞辞典 森 謙吉 B6 一八〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 隆雄 B6 一八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木 謙三 B6 一八〇〇円

類語辞典 鈴木 謙三 B6 一八〇〇円

類義語辞典 徳川 實島編 B6 三〇〇〇円

表現類語辞典 藤原与一他編 B6 四八〇〇円

新版 文章表現辞典 神島 村松編 B6 二二〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 東郷 B6 一八〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇樹 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 堀井幸知他編 B6 一三〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井幸知他編 B6 一三〇〇円

難訓辞典 中山 幸徳 B6 三〇〇〇円

名乗辞典 荒木良造編 B6 一八〇〇円

名数数詞辞典 森 謙吉 B6 一八〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 隆雄 B6 一八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木 謙三 B6 一八〇〇円

類語辞典 鈴木 謙三 B6 一八〇〇円

類義語辞典 徳川 實島編 B6 三〇〇〇円

表現類語辞典 藤原与一他編 B6 四八〇〇円

新版 文章表現辞典 神島 村松編 B6 二二〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2

ロスでのハプニング (南柏雑記 13) .....	1
『連句辞典』読後 .....	草間時彦..... 2
『連句辞典』書評(抄) .....	今泉準一, 石寒太, 山田みづえ..... 4
祝賀・明雅先生古稀 .....	二村文人..... 7
市中の巻 (1) .....	東明雅..... 8
八戸俳諧倶楽部探訪の記 .....	二村文人..... 12
紅葉大樹 .....	歌仙..... 東明雅(捌)・加藤耕子(文)..... 14
第3回(昭和61年度)武翁賞発表 .....	16
絶頂の城 .....	20
第六回俳諧芭蕉忌 第十九回 猫蓑会 .....	
第一部 正式俳諧興行 脇起り二十韻 百歳の気色	
第二部 脇起り二十韻 初時雨 六巻	
捌 馬場東夷 米谷貞子 中田あかり	
杉江杉亭 坂本孝子 副島久美子	
恥かしながら執筆の大役 .....	中川哲..... 26
連句教室 .....	木犀 明雅 捌 鱗雲 徒司 捌..... 28
式目歌 .....	11 連句会案内・雁帛往来..... 29

表紙 (猿猴) 宮崎龍火子

ロスでのハプニング  
南柏雑記 13  
雅

去年二月、ロス郊外パロス・ベルデスに住む娘の家で、子守りと芝刈りを二週間やり、それがとても楽しかったので、今度もそのつもりで、しかも二月行った時暖かだったので、今度は八月、さぞかし暑いことだろうと、半袖のシャツとズボン、それも普段着のごくラフなスタイルで行ったのが失敗だった。第一、八月と言ってもそんなに暑くない。気温は相当高いのだが、湿気がなくてさらりとしていて、パロス・ベルデスは海につき出た半島だから、海風が強く、夕方など半袖では冷え冷えした。それから、日本を発つ時、俳人協会理事長の草間時彦さんにちよっとそのことをお話したら、向うの俳人を紹介して下さるとのこと、これもお茶を飲む位のことかと、気軽に御厚意を受けた。ところが、その紹介された竹本義人博士にお逢いしたらロスとサンディエゴで講演をしてくれとのこと慌てた。まさか、よれよれの半袖、汚れたズボン、ぼろぼろの靴では、いくら心臓の私でも外国の紳士・淑女の前に立つわ

けにはいかなないではないか。そこですぐ近くのシアーズというデパートに行き、早速、一応の身のまわりを整えた。参考までにお値段は、上着一七〇弗、ズボン五八弗、靴六四弗。感心したのは上着もズボンもちっとも直さずにびたりとそのまま着れたことだ。日本のデパートでは、A6で間にあう私だが、ズボンは裾がまつてないので、それを合わせなければならぬ。だが、アメリカのはその苦勞もなくびったりだった。広いアメリカだが、私と全く同型の人間が居るといふことは嬉しかった。

ところで、肝腎の講演は八月十六日と十七日、サンディエゴの菊ガールデンとロスアンゼルスの日米文化会館で行なわれた。ロスアンゼルスには十万の日系市民が住み、サンディエゴとともに俳句の結社が幾つもあって、なかなか盛んである。竹本博士も「鷹」(藤田湘子主宰)のメンバーの一人で、「病葉」(竹本義人全集第一巻)の著を頂戴したが、評論あり、詩学・俳学・歌学・随筆とも沢山の大家程度、二世・三世の方が多かった。聴衆は両方とも三十人も交じって、熱心に聴いて下さった。私は芭蕉の話から連句、歌仙から二十韻の新しい形について大いに宣伝した。八月二十二日、竹本御夫妻を迎え、家内を交えて四吟の二十韻を作ったが、これがアメリカで初めての二十韻であることだけは確かである。

# 『連句辞典』読後

草間時彦

若いころは本が買いたくて仕方がなかった。

読みたい本はいくらもあつたし、読む時間も、有り余るほどあつた。しかし、買う金がなかった。今は、本を買うぐらゐの金はなんとかなる。だが、買っても置く場所がない。眼が弱くなつていたので、長時間読んでいると、くたびれる。それで、買っても読み切れないことが多い。それで、欲しい本があつても、なるべく買わないようにしている。のだが、辞典の類は見掛けると買うことにしている。

国語では小学館の『国語大辞典』漢和は大修館の諸橋大漢和。この二つがあると、大体は間に合う。『京都語辞典』とか、『江戸語事典』なども結構役に立つ。古語辞典はどれがよいのか、一長一短で判らない。角川の『古語大辞典』が完結すれば、信頼出来るものになるだろう。

さて、俳句関係では、明治書院の『俳諧大辞典』と『現

らない時、月の字を用いないで月を詠じた句を作ることとある。といて、小学館版全十冊を書架に蔵している人は少いだらう。そういうとき、『連句辞典』は便利である。もとより、影の月の項が入っている。

私は「影の月」は知っていたが、この辞典のページを繰りながら、随分知らない言葉があるのに気付いた。「たけくらべ」もそうである。「連句の座で誤って、長句に長句を付け、短句に短句を付けるのをいう」とある。そして、「俳諧名目抄」の「至極初心の雑会にままあることなり」が参考として引用されている。私も、シラフのときはめづらないが、多少、アルコールが入っていると、たまにこういうことがある。今度、そうしたら、「たけくらべをしてしまいましたね」と言ってみよう。それにしても、「至極初心」ということか。私は失笑した。

恥をもう一つ。「聳物」という言葉がある。雲や霞、煙などだが、私は「そびえもの」と読むものとはかり思っていた。連句辞典のふりがなで始めて知ったが、「そびきもの」だった。よい勉強をした。そう言えは、「聳」には「そびく」という訓があつたのである。「治定」は「じてい」と読みたくなるが、「じじよう」「文音」は「ぶんおん」でなく、「ぶんいん」。今迄の指導書や解説書は読み方のふりがながないのが多かった。そういう点では、この辞典の各項目に読み方が記してあるのは有難い。

用語篇で難しく、執筆者が苦労したのは、付味についてであらう。心付とか物付とか、そういうことは実例を挙げて

代俳句大辞典』。後者は私も編集委員だったので、良い面も知っているが、反面、項目の粗さと、内容的に片寄っていることも知っている。殊に、連句については、一応、通り一へんの触れ方に過ぎない。これは紙数の関係で、止むを得なかつたことだった。専門の連句辞典が刊行されることを、ひたすら待つことだった。

連句には専門語がある。専門語であると同時に、一座に共通理解出来る付号のような言葉であることもある。

「影の月」という言葉がある。連句をやっている人なら誰でも知っているだろうが、初めての人がこの言葉に突き当たったとき、何を調べればよいのか。『俳諧大辞典』にも『現代俳句大辞典』にも、この項はない。小学館の『国語大辞典』には流石にこの項がある。

かげの月(つき) 俳諧で、月という字を避けなくてはな

も、なかなか判り難い。それを言葉で説明するのは苦勞が多かつたと思う。又、連句の故実や口伝に通じている俳諧師には通用するが、現代連句の実作者には、日常語として無用の言葉となつて語がある。そういう項目にどこまで重きを置くか、そのバランスには苦勞があつたらう。この辞典の題が現代連句辞典でなく、連句辞典であるところに、内容的に幅を広く持たせたいという編者の苦心があつたのだと思う。

現代連句人にとっては、本辞典はある意味に於て、実用書である。例えば「縞」という言葉。人情が二句、人情なしが二句、又、人情が二句とつづくのを言うのだが、多くの人は知らない。しかし、知ってしまうと、

「ああ、ここは縞ですね。」

という言葉が容易に出てくる。「縞」は実用語として便利なのである。そういう言葉を実作者に教えるだけでも、この辞典は価値がある。

この辞典で、別の意味で貴重なのは人名篇である。この五十余人のうち半数は、従来の俳句辞典などで項目とならなかつた人である。よく、ここまで調べたものと敬意を表したい。この人名篇は今後、他の辞典に孫引きされることは必至である。それだけ価値の高い文献なのである。

私の書架の辞典は、多く引くものは前列の手を出し易いところに置いてある。連句辞典も、たびたび、引っぱり出すであらう。もっとも、よい位置におくつもりである。

# 『連句辞典』書評(抄)

特殊性を心得た編纂

——週刊讀書人(九月八日付)

今泉 準 一

連句に関心をもつ人にとっては連句辞典の出現は待望久しいものがあつた。本書の刊行はこの意味でまことに時宜を得たものと言える。用語篇・人名篇、そして巻頭に「近代連句入門手引き」、巻末に「近代連句概説」・「近代連句略史」が載る。連句の特殊性をよく心得ての編纂と言える。

連句をやってみたいと思う人、また実際に連句をやっている人、近時この種の人はかなりの数になる。一方、実作とは関係なく、連句とはどのようなものかを知っておきたいと思う人、このような意味で連句に関心をもつ人の数も多い。本書はこのような人びとを対象として手軽にその要望に応じ得るように作られた辞書である。

連句入門書の類はすでに十指に余るものが公刊されている。これらを読んで感じることは、当然のことではあるが、実作者の手になるものは式目(規則)の取り扱い等には具体的で大変わかりやすく説明されてあるが、その沿革

はどのようなものかがこの簡潔な説明で十分に知り得る。

同様のことは用語篇以下にも言える。「用語篇」に「参考」の欄を加えた点は本書の大きな特色である。編著およびスタッフの方々の努力に敬意を表したい。三二四項目に絞ったことはかなり苦心があつたことであろう。従つてこれに対する私見は省略する。これは「人名篇」を物故者に限つた賢明さにも現れている。しかもその選択には学者的冷静さの見られる客観性がある。当・不当はとにかく、これには異論の生じることが予想される。これは「近代連句略史」でも同様である。しかし私の見たかぎりではその克明さ・正確さには驚きを覚える。座右に備えるに足る一書である。

(明治大学教授・国文学)

寒雷図書館(寒雷十月号)

石 寒 太

最近、連句が静かなブームを呼んでいるという。作家・評論家・詩人らで歌仙を巻いたり、連句入門書も、けっこう読まれていくという。

そんなブームにあやかるとはいいが、今度、東京堂から『連句辞典』が出た。本書は、実作上での初心者に対する配慮もさることながら、連句の実作・鑑賞の手引き・研究の参考になるようあらゆる面に心を配って編集がなされた、はじめての辞典である。

用語篇・人名篇に分かれ、巻頭に「近代連句入門手引き」が付されているのもいい。また、巻末には「近代連句概説」「近代連句略史」「文献資料」が添えられ、これだ

の説明に疎であり、また学者の手になるものはその逆である。編者東氏は周知のように国文学者であり、しかも実作者である。その上実作指導の経験も豊富で、入門書・作法書の著も多い。まず、巻頭の「近代連句入門手引き」を読むと、三〇頁に満たない解説であるが、従来の書に感じる歯がゆさ・とまどいがなく簡にして要を得、わかりやすく十分に行き届いた説明である。もちろん私自身多少の異見もある。だがこれはいわば流儀を異にするそれぞれの見解というもので、その説くところはおおむね穏当である。しかも多くはその都度に断りがしてある。

ただこれについては本書全般に通じていることでもあるので一つだけ要望を私見として述べておきたい。氏は「凡例」で、口伝の重要性に言及し、これを探し求めることは「至難の業」と述べているが、実はこの点でも氏は現存の人でこれに最も詳しい人のうちの一人である。従つてこの解説の中でも文献渉猟では得られない連句用語が出てくる。これらには断りをちよつとつけ加えられると、一般知識人には一層説得力のあるものになったのではないか。わかるものにはすぐわかることなので必要がないことも多いので要望というだけのものである。ともあれ、連句と

けを読んでも、連句のおおよそが理解できる。

これから連句を実際にやってみたいと思つている人、実際にもう連句をやっている人、連句に興味をもつている人、こういう人が、いま随分と多い。このような時期に本書が刊行されたことは、まことに時宜を得たものであり、いい企画であると思う。

実作はしないが、連句とはどのようなものなのか、連句というものを知っておきたい人、そういう人も多いように思う。そのような人々の知識にも十分応えるように解説されている。

岩波文庫をはじめ、連句入門書は、ないように見えていろいろとあり、十指に余るほどである。しかし、従来の書を読んで感じることは、当然のことながら、実作者の手になるものは、約束の取扱い方は具体的で大変わかりやすく説明されているものもあるが、片方で歴史沿革の説明となると、ほとんど触れられていないものが多い。かと思つくと、逆に学者の筆になつたものは、難解で実作の用をなさない。

本書の編者、東明雅は、国文学者であり、しかも連句の道の練達である。実際に何人かと連句を巻き、その連句集ももっている。

まず、巻頭の「近代連句入門」によって、連句の流れを知ることができる。

用語によって、そのひとつひとつの必要な知識を知ることができる。

「用語編」に参考欄が付いているのも、この辞典の特色である。三二四項目は、はじめて連句を知る人々にとって、必要にして十分な項目であろう。

付録として「歌仙季題配置表」「蕉風俳諧変化表」のふたつが付いているのもいい。素人には、まずこれが不可欠である。この表を前に置いて、仲間同志で一句づつ作ってもいい。しかし、はじめは適切な指導者がいることが、より望ましいことはいうまでもない。

用語解説の的確さ、克明さなど、どのひとつをとっても、従来なかった連句入門書となりうる。

現代における連句理解必須の知識と解説を盛り込んだ、この『連句辞典』は、きつと多くの人の座右の書となること、間違いない。

まず、読むこと

そして連句の座に入ること

——「木語」(十月号)——

山田 みづえ

連句ブームだそうである。それは十五年前から仲間と可成り放恣な(というのはルール上のことで、ズブの素人を仲間にする為には捌きの裁量でそうなったのだが)自由な連句をやつて来た私にとっては、ブームという感じはなかった、よく目をみはつて周囲を見廻すと、十年前からは連句々々と騒いでいるのがわかるようになった。

それで、連句の話などもぼつぼつ求められれば話する機会が出てくる。その折に、連句に関する辞典、極く普遍的

## 祝賀・明雅先生古稀

### 二村 文人

今夏、東明雅・杉内徒司・大畑健治三氏の編集になった『連句辞典』が東京堂出版より刊行された。又、明雅先生には、昨昭和六十年三月古稀をお迎えになった。私も原稿の執筆をお手伝いさせていただいた一人で、その何回目かの編集会議が、偶然先生のお誕日にあつたのだが、神保町裏の安酒場で「おめでとうございます」と申し上げただけで、そのままになってしまった。多少改まった席でのお祝いの会を考えないわけではなかったが、先生御自身辞典の編集にお忙しい日を送り、又私達も原稿のはかどらない時期で、うっかりそんな計画を申し出ると、その時間があつたら原稿を書けとかえつて叱られてしまいそうであり、取り敢えずは辞典の完成を見るまでということにして見送りになってしまった。

信州大学の私達の学年は、女子七人に男子五人の女性上位で「花の国文」と呼ばれていたが、丁度先生の末のお嬢さんと同じ年ということもあつてか、随分可愛がつていただいた。昭和五十年、私達の卒業と時

でいいから、一括して連句の見渡しが出来ようない書がほしいと思つていた。我流でテキストを作つてしまうのも一法とは考えても、俳句の方が本業で、おまけに一誌をかえ込んでいては、とてもそのような芸当は出来かねると思つていたところであつた。

復権する「座の文芸」連句の魅力と謳い出している。連句を母胎として発生した俳句をたしなむ人は、一度は連句をやつてみるといいと思う。芭蕉の七部集も連句をやつてみると、なるほどと思ひ当り、現代俳句では思いもよなかつた時代相や風俗の背景が、ありありと現出してくることを考えると、この辞典は大きい効果を、連句へ好奇心を抱いている人々により大きく働かだろろうと思う。

この辞典は、極めて現代的、現場的で、実地に連句に一座してみたいと思ふ人には、手にとるるよりに親切な辞典である。

人名の方で小宮豊隆(蓬里雨)・寺田寅日子・志田義秀・富山の人、下平可都三のことなど、知つてゐる人、知らぬ人など多く登場する中に、能勢朝次・星加宗一の名があつて、それぞれに感懐深かつた。能勢朝次を師とする人中国北京で出会つた。東京文理大で習つたという刈先生であつた。星加氏は父の連歌の弟子に当り、戦後は松山連句会にあり伊予の俳諧をよく研究した人で、学生時代を知つていたのでなつかしい。連句ブームの波は少し落着くと思ふが、その時こそ真の連句好きの連句が行われると思ふ。軽薄を瀟過して。

を同じくして先生は還暦をお迎えになつた。確か卒業式の夜だつたと思うが、松本郊外の浅間温泉にささやかな祝宴を催し、半ば強引に赤いチャンチャンを着ていただいた。

さて、『連句辞典』の完成を機に、その出版記念会を兼ねて先生の古稀をお祝いし、親しく教えを受けた者が一堂に会することになった。大畑さんと語り、九月十三日、場所は「根津の甚八」と定めた。この店の主人は、信州上田の出身で、真田十勇士の一人根津甚八に因んで、根津の地に店を開いている。実は明雅先生が定年で信大をおやめになつて上京されたとき、在京の卒業生で歓迎会を開いたのもこの店であつた。主人もその時のことをよく覚えていて、貸切り、飲み放題の席を用意してくれた。メンバーは、辞典編集の反省会の意味もこめて(実際には飲むほどにこの趣旨は忘れられてしまつたが)、先生御夫妻、原稿執筆者、連句作品を提供してくださつた方を中心に人選させていただいた。

当日は夕方から生憎の雨模様になつたが、二十一名が集まり、狭い店の中は身動きのとれないほどになつてしまつた。会は大畑さんの司会で進行し、信大連句会の連衆加藤慶二・小出きよみ両氏の祝辞、旧制松高時代の教え子武藤碩夫氏の乾杯、東京堂の菅原洋一氏の編集報告、徒司氏の真田十勇士の披露(徒司氏はそのために都立中央図書館まで足を運び当日を期していた

が、既に店の戸棚の中に十勇士を記した書き物があり、せつかくの努力は報われなかつた)と続き、記念に御夫妻の益々の御健筆を願つて万年筆をお贈りした。そして、最後は松高寮歌「春寂寥」と長野県歌(「信濃の国」の大合唱でお開きになった。その晩、大畑氏ほか若手数名は、坂本孝子女史を語らつて深夜の上野へ繰り出し、さら科の「天抜き」をさかかなに、蕎麦屋に似合わぬ議論の花を咲かせた。さまざまない機会に明雅先生の下に集まつて来た者達にとつて、お互いに新しい出会いの生まれた一夜であつた。

根津の「甚八」借切り祝ぐや秋灯

徒司

# 「市中は」の巻 鑑賞 (I)

東 明 雅

私は朝日カルチャー・センターで、昭和五十六年十月から約三年間、芭蕉や蕪村の俳諧作品を講義していた。それは病気のため、中断したが、近ごろ、たまたま篋底にその当時の膨大な原稿の束を発見し、当時を偲んで懐しいととも、切角のものをこのまま紙魚の棲家としてしまうのも惜しい気がして来た。当時、受講された方には繰り返しになるけれども、初めての方には参考になると思うので、敢えてこれから本誌に連載するつもりである。「市中は」の巻を最初に取り上げたのは、「季刊連句」第九号から第十三号まで「連句の読み方・味わい方」として鑑賞した「木のもと」の巻が、元禄三年三月の作品であるのに対して、この「市中は」の巻はその年六月の作品で、「木のもと」の巻との読みくらべによって、芭蕉俳諧発展のあとを、端的に知ることができるとともに、この「市中は」

の巻こそ、芭蕉俳諧の精髓を示すものとして、定評があるからである。もともと、「猿蓑」には卷之五に「鶯の羽も」の巻・「市中は」の巻・「灰汁桶の」の巻、そして「梅若菜」の巻の四歌仙が並んでいる。このうち「梅若菜」の巻は芭蕉の句は三句しか出ていないので別として、他の三巻はいずれも傑作の評が高いけれども、「市中は」の巻が芭蕉・去来・凡兆と、「猿蓑」編集の中心となった三人の三吟であるのに対し、「鶯の羽も」の巻には史邦を加え、「灰汁桶の」の巻には野水を加えているのは、それぞれの巻に変化と特色を持たせようとする意図があったと考えられ、この点から言っても「市中は」の巻は、「猿蓑」俳諧の原点として、最も尊重されるべきものである。ただ、私はこのごろ老耄、老懶ともに、度し難くなつて来ている。この稿不備な点も多いだろうが、昔語りの繰り言としてお

読み下されば幸いである。

市中は物のにはひや夏の月

(三夏 夏の月 人情無)

凡兆

まず、この上五の「市中」を「イチナカ」と訓むか、「マチナカ」と訓むか。多くの学者は芭蕉ならびに七部集の用例から「イチナカ」と訓んでいる。しかし、この市中が狭い市場に出ている月を詠んだのではなくて、町の中、巷の中に出ている月を詠んでいることは、折口信夫氏を除いて皆賛成しているところであり、伊藤正雄氏はわざわざ「市中を市場の中と解するのは狭い」と述べられている通りである。その他古典大系にも「市中＝町中・市街地」と注がある。市場に物の臭いがするのは当然すぎる程当然で、それは今で言えば熱帯夜というべき頃の月と対称するには、あまりに小さすぎる。さればこそ、「市中」と訓む学者もその意は市街の意に取り、必ずしも、市の立つ狭いところ限定しないのであろう。第一、それでなければ、脇句の「あつし／＼と門／＼の声」の「門／＼」が響かない。また諸橋大漢和によれば「市」にはイチ・マチと両方の訓みがあり、芭蕉や七部集には用例がなくとも、凡兆の特異で鋭い字の使い方とすれば、阿部正美氏の挙げられた「炭俵」における「市中や木の葉も落すふじ嵐」の例も、作者が桃隣であり、その「市中や」に振仮名がない以上、確定的な証拠にはならないだろう。それに対して、天野雨山氏・萩原羅月氏など、俳諧の伝統に立った人はいずれも

マチナカと訓んでいるのは、このような訓みぐせがあつて、これを伝承したことを示している。わが師、根津芦丈翁もマチナカと訓んでおられた。俳諧は口伝が多いが、この「市中」を「マチナカ」と訓むことも口伝の一つなのである。現代の人の多くは、何か本に書いてなければ信用しないという癖がある。近世の俳人はそうでなく、師から口伝されたものを第一と考えた。これはどちらが正しい態度かと言っているわけではない。近世の文学を研究する場合には、近世人の心を大切にしなければならぬことは当然であろう。だから、私はあくまでも、「市中」は「マチナカ」と今後も訓むつもりである。

芭蕉は元禄三年六月上旬、京に出て、同月十八日まで、小川樞木町上ルの凡兆の宅に逗留した。この発句はそのあたりの実景であろう。当時の樞木通りの実態は詳かにしないが、凡兆が商人でなく、医を業としていたから市場には直接関係はない筈である。さらにこの句を凡兆の芭蕉に対する挨拶の句と見る説がある。「凡兆は、幻住庵から甚暑の京のまちへ下りて来た芭蕉を迎えて、ねぎらいの一句を示している、と同時に『夏の月』はその涼味を寄せて、師の山居の清々しさを仰ぎ讃える体の、精神的表現ともなっているよ」(安東次男氏の評釈)。そこまで挨拶の意を取るのには、純客観描写をもって知られる凡兆の作品から見ても異例すぎるし、亭主にそれまで言われれば、客の芭蕉も挨拶に窮したであろう。ただ、「この市の中は暑くてむんむんしてどうも恐縮です

が、あの涼しい月でも眺めて安らいで下さい」位の挨拶ならば、芭蕉も気軽く、「いや、この夏はどこでも暑く、毎に暑い暑いと言っていますよ」と主人を慰め、挨拶を返した位のものと見たのである。

市中は物のにほひや夏の月  
あつし／＼と門／＼の声  
(晩夏 暑し 人情他)

凡兆 芭蕉

中天には夏の月がかかっているが、町の中にはいろいろな臭いが立ちこめ、人々は門口に涼みながら、暑い暑いと言っている

(付心) 打添付・起情の句

△「脇は暑し／＼と言うが、夏の夜には付たる也。月は二句の間にあり、扱、市中といふに門々と請て、声は物のにほひといふ人に対して情を結びたる也」(几董・付合てびき蔓)。但し、几董はこの句を其場の付けとしていた。

△「この脇、〃句ひや夏の月〃とあるを見込て極暑を顕して、見込の心をてらすなり」(三冊子)

(付味) うつり。発句の「市中は」に対して、「門々」、「物のにほひ」に対し、「あつし／＼」は、付き過ぎる位近い。それよりも、この句は、太田水穂が指摘したように「前句を受けとるや否や、すぐと送り出たような句ぶりである。こういう付が気先で行った句というものであろう」と言っている方が納得される所であり、前句のわくの

あつし／＼と門／＼の声

芭蕉 去来

二番草取りも果さず穂に出て  
(晩夏 二番草 人情他)

(現代語訳) 今年は酷暑で、人々は暑い暑いと口々にこぼしているが、その代わり稲の成育がよく、二番草も取りきらぬ前に穂に出してしまった。

(付心) 二番草を取りつくさぬという点に重点をおけば、前句の人と同じであるから、其人の付けとなろう。また、この句全体を一つの会話体と見る考え方もある(宮本三郎氏・伊藤正雄氏)もある。そのように見れば、対付とすべきであらう。

(付味) 暑さの気分の移りとともに、背後からせき立てられるような繁忙の感じが、前句の「あつし／＼」「門々／＼」などの句調と相応じている。「ひびき」の付けである。

天野雨山氏は「豊年の希望に輝くような気趣が、家建ちならび入市にみつという前句の賑かさに応ずる」という。

中で突嗟にそれも日常の会話をもってつけたところにもしろさがある。

(補説) 発句の「夏の月」は三夏である。発句が三夏である時は、脇で当季を定めるべきである。「暑し」という季語は、現在は三夏だが、芭蕉在世時代の歳時記類にはなく、「暑き日」はすべて末夏(晩夏)となっている。

さらに、三冊子を見ると、「又、猿蓑に、脇三を三体に仕わけてなし置たり。心付て見るべしと也」という芭蕉の言葉が記されている。この巻の外の脇の句を示すと、

〇蕉の羽も 刷ぬはつしぐれ

去来 芭蕉

〇灰汁桶の雫やみけりきり／＼す

凡兆 芭蕉

あぶらかすりて宵寝する秋  
であるが、この三つの脇はどこが違っているのであろうか。これについて安東次男氏は、ひびき(「蕉の羽も」の巻)、うつり「市中は」の巻)において、「灰汁桶の」の巻)の三体に仕分けたものと言われ、阿部正美氏もこれに同意しておられる。しかし、これも俳諧師の口伝を伝えた清水瓢左氏の言「発句は皆人情無しの句である。『市中は』の巻はそれに人情他の句を付け、『蕉の羽も』の巻は人情なしの句を付け、『灰汁桶の』の巻は人情自の句を以て付けたもの」の三体説も尤と聞こえる。要するに安東・清水両氏の説を加え合わせたところが、芭蕉のひそかな自慢ではなかったか。

(転じ) 都鄙と昼夜とに転ず(古集弁)にあるように場所・時刻を転じている。その上、打越・前句にあった一脈の涼しさが前句・付句では晩夏の極暑の風景に転じている。

### 式目歌

- 衣着や竹田の船路夢泪
- 月松 枕 五句隔へし
- 同じ文字 神祇釈教恋無常
- 夜分時分三句去へし
- 天象に聳 降物 人倫や
- 名所 国名 二句隔へし
- 魚と鳥 獣と魚 木と草や
- 草と竹とはこれも二句去り
- 天象は 月 日 星 なり聳には
- 霞 雲 霧 煙 なりけり
- 降り物は 雨 露 霜に 雪時雨
- みぞれ 雪丸に雪と知るへし

著 雅明 東

## 連句入門

中公新書 508号  
価 五〇〇円

## 芭蕉の恋句

岩波新書 91号  
価 三二〇円

## 猫蓑

永田書房  
価 二二〇〇円

## 連句辞典

東杉内・大畑共編  
東京堂出版  
価 三五〇〇円

# 八戸俳諧倶楽部探訪の記

二 村 文 人

私が世話役をしている日本文学協会の近世部会では、毎夏、勉強半分遊び半分の旅行を続けている。今年で六回目になるが、一年目の太宰治の生家津軽金木の斜陽館以来、上田秋成の生母を調査するために訪ねた大和葛城山麓、同じ秋成『雨月物語』の「樊噲」を追って伯耆大山に登ったその晩の玉造温泉などでは、私が俄か宗匠を勤めて歌仙を試みたりもしている。

さて、今夏は久しぶりに東北へ出かけ、恐山から八戸、そして遠野のコースを歩いたが、その途中、八戸俳諧倶楽部の理事長関川竹四氏を訪ねた。『連句辞典』の俳席に関する用語の執筆を担当したとき、当地に伝わる正式俳諧興行の資料を提供していただいていたからである。正式俳諧の項を書くにあたって、東京に残る根津芦丈門の作法は、大山阿夫利神社や大林柚平氏の抱虚庵襲分の折などに実見しており、又獅子門についても、昨年、岐阜の国島十雨氏を訪ねて直接教を得ていた。八戸のものはその実態がわからず、原稿執筆の際には、八戸出身の柏崎順子氏に調査をお願いした。此度は出来上った辞典を携えての表敬訪問というわけである。

八月十二日、晴天猛暑。八戸に一泊した翌朝である。市立図書館へ出かける一行に別れて、私は湊町上ノ山の関川竹四氏宅へ向かった。余談になるが、市立図書館には、藩と、その席に南部殿御代参の僧浄教院こと珠妙が一座して、「澄水に天の浮べる秋の風」の句を残している。

現在、八戸の俳諧は、八戸俳諧倶楽部の名で存続している。当地の俳諧は、天明以来互扇楼・星霜庵・百丈軒・花月堂・三峰館の五大宗匠を中心に続いてきたが、明治三十六年、同倶楽部が組織された。現在の会の指導者は十六世星霜庵池田風信子氏で、六十名程の会員がいる。機関誌は発行されていないものの、次にあげる年に五回の雅会が欠かさず行われている。

正月  
四月十五日 詠初雅会  
五月十二日(旧曆) 古心忌雅会  
八月十五日(〃) 梅香会  
十月十二日(〃) 親月雅会  
時雨忌雅会

古心忌は、八戸俳諧中興の祖と讃えられて昭和二十六年に歿した百仙洞北村古心の忌日である。このうち最も盛大なのが梅香会で、正式俳諧もこの時に興行される。梅香会は、先に述べた七代藩主信房が、陶淵明と菅原道真を尊崇し、淵明の別号五柳先生と菅公の梅に因んで、互扇楼の号を譲った後自ら五梅庵と称したところから、その忌日をこう名づけている。正式俳諧は、倶楽部創立当時は十年に一度の催しだったものを、会員間に作法が定着しないということで、数年前より年中行事化した。

作法のうちやや特徴的なところを次に抜き出す。まず、床には始祖畔李公の肖像を掲げ、その前に神酒・選米・野

政時代からの読本その他江戸戯作の膨大な蔵書がある。私も数年前、丁度東北新幹線の開通した直後に訪ねたが、当時は木造の古い建物が書庫で、そこへ籠ってそれこそ手あたり次第に美本の数々を見たことを覚えていた。関川氏のお宅は、鯨行のバスを柳町で降り、山手へ上って十王院の門前である。御主人は、年輩のいかにも温厚な方だが、倶楽部の運営の中心的存在であり、又『八戸俳壇の歩み』などの労作を見ると、その精力的な活動に驚かされる。

以下、関川氏の編集になる『八戸の俳諧』及び同氏からうかがったところに基づいて、当地に伝わる俳諧のあらましを記す。八戸の俳諧は、天明三(一七八三)年、第七代藩主南部信房が、江戸屋敷で雪中庵三世大島蓼太の門人楓台互来(八戸藩士窪田半右衛門)から立机の免許を受けて互扇楼畔李を、又令弟右京が百丈軒互連を号したのに始まる。俳諧史に八戸の地名が現れるのは、延宝九(一六八一)年、盛岡の知機軒幽閑の選句集『それぞれ草』に、八戸領久慈の林鳥軒の名が見えるのと、翌天和二(一六八二)年、当時仙台にいた大淀三千風の『松島眺望集』(芭蕉も一句入集)に、八戸周辺の数人の名があがっているのが初めである。又、芭蕉は『奥の細道』の旅の途次、元禄二(一六八九)年六月四日から九日にかけて、羽黒山本坊で歌仙一卷を満尾しているが、曾良の随行日記による

菜・活魚・菓子・果物・水・塩が、それぞれ、三宝に盛って供えられ、床の左右には生花一輪ずつが捧げられる。立宗匠の挨拶の後、奉行(この呼称は獅子門にも残っている)の指図によって香司が床に進み、燭台に灯を点じ、香を薫く。奉行の「執筆いざ」の合図によって、執筆は文台を捧げ持って所定の席に着き、文台捌きの所作を披露する。又、読誦の際には、執筆が句の花の前で「花前」を告げると、奉行の合図によって香司は改めて香を薫き床に捧げる。宗匠は文台の前に左膝を立てて威儀を正し、同時に執筆も左膝を立てて花の句を吟声する。

雑誌『国文学』昭和61年6月号の八学会時評Vで高田衛氏は、同誌4月号の特集A連句のコスモロジーVに載った「獅子門翁忌古式俳諧」の誌上再現について触れ、「席札検閲やら献花やら文台捧進やら、そうしたセレモニーの一つ一つの無意味の意味をたどることで、連句というゲームを作りあげた近世人の精神の運動が見えてくる。」と述べている。

〔付記〕八戸の俳諧史に関しては、  
○二川居桜曙誌・百仙洞古心編『八戸俳諧史』(昭和8)  
○関川竹四編『八戸の俳諧——八戸俳諧倶楽部八十周年記念誌——』(昭和56、三百部限定非売品)  
○関川竹四編『八戸俳壇の歩み』(昭和57、非売品)が備わる。又、文台捌きの作法については、『八戸の俳諧』に藤井白兆氏(十五世星霜庵)が詳細を記している。





第三回 武翁賞発表(昭和六十一年度)

歌仙 白 露

上月 淳子 捌

連衆

氏原 正雄・山口 みづゑ  
米谷 貞子・大窪 瑞枝  
雑賀 遊・坂本 孝子

二十韻 竹皮を脱ぐ

櫻井 天留子 捌

連衆

福井 隆秀・米谷 貞子  
秋元 正江・原田 千町

努力賞

二十韻 端 居

文音 佐土原 婦美枝  
中田 あかり

賞状副賞 各参万円

選考委員

東 明雅  
草間 時彦  
杉内 徒司

本年度武翁賞には歌仙八篇・二十韻六篇の応募がありま  
した。選考委員が慎重に審議した結果、歌仙「白露」と二  
十韻「竹皮を脱ぐ」の両巻が入選しました。昨年の受賞作  
がいずれも文音であったのに対し、今年の作品はともに座  
の中で生まれたものである点に、意義の深いものを認めま

す。さらに、二十韻「端居」の佐土原さんはお目が御不  
由であるにもかかわらず努力された点、また、中田さんが  
佐土原さんを励まし、助けて連句のよるこびを教え導かれ  
た点(別記参照)を考慮して、特に御兩人に「努力賞」を  
差し上げることになりました。  
(十月十一日)

歌仙 白 露

上月 淳子 捌

街路樹を風鳴らしゆく白露かな

淳子

春塵の淡くかかりし文机

貞 雄

上りそめたる金色の月

正雄

写真とるブルーメリアのレイをかけ

枝

水頭輪話やうやくほぐれきて

みづゑ

メイドインジャパンスーベニールは

同

撫でゐし猫の眠るゆり椅子

貞子

不倫の相を秘むる掌

孝

ペナントに優勝カップ置き並べ

瑞枝

あれもいやこれも飽きたと妻を抱き

ゑ

麦稗帽を忘れ行きたる

遊

壁の鏡が厭な告げ口

貞

瑞垣に噴井溢るる音閑か

孝子

滔々と大河の果の海に消え

ゑ

誘ひの言葉妙にやさしく

貞

胡弓流しつ過ぎる裏町

孝

中絶カンパ廻す教室

枝

月祀りつくり伝へし絵臘燭

貞

書記長の器かんばし双葉より

孝

するりいちぢく剥いてくれる子

孝

富士を取り巻き湧き起る雲

遊

秋刀魚焼く煙の中を帰り来し

遊

明星も添ひて冴えたり冬の月

遊

大礼服の曾祖父の像

枝

終電車待つ足の冷たき

遊

過疎村に一つ残れる萱の家

枝

咲阿売覚えるまでのひと苦勞

遊

目借時なり髪刈られつつ

遊

護国寺の庭餌捨ふ鳩

遊

吾が庭の若木の花を眺めゐる

淳

花の下バスより園児こぼれ来る

遊

面打つ人の臍なる影

淳

難の土鈴ころころと振り

枝

昭和六十一年九月八日

孝

於K・D・D会館首尾

連衆

氏原 正雄・山口 みづゑ  
米谷 貞子・大窪 瑞枝  
雑賀 遊・坂本 孝子

